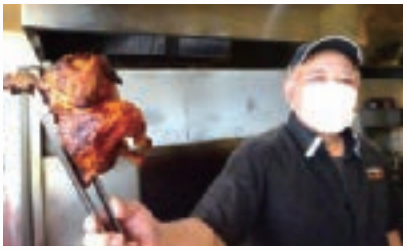
Japanese Overseas Migration Museum News
No.56
2021 | August

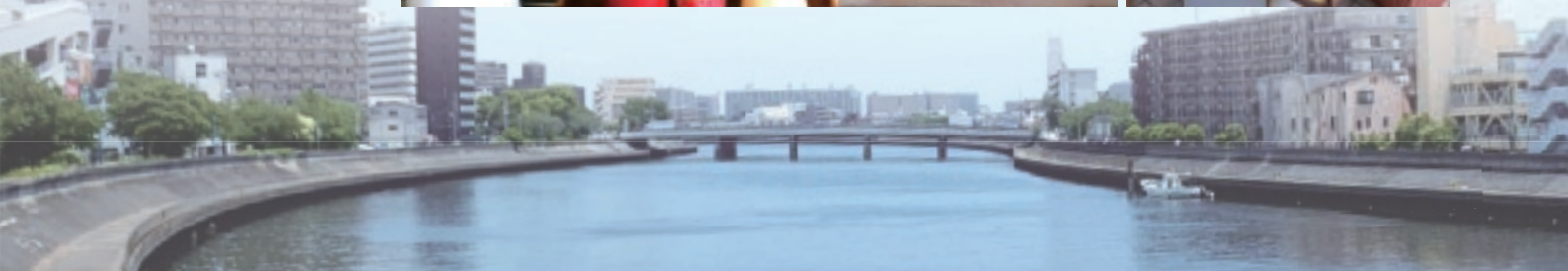
海外移住資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257（代） URL: https://www.jica.go.jp/jomm
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 中根 卓

特集 在日日系コミュニティを探索！
～多文化タウン・鶴見の魅力大公開～





特集

在日日系コミュニティを探索！

～多文化タウン・鶴見の魅力大公開～

2016年から開催されている「鶴見ウチナー祭」。南米系のお店も出店し、たくさんの来場者でにぎわう

日本の労働力不足を解消するなどのために1990年に施行された改正入管法によって、ブラジルやペルーなど南米諸国から大勢の日系人とその家族が日本に働きに来るようになりました。いわゆる「デカセギ現象」で、工場などで働く日系人たちが集まり、群馬県の大泉町、静岡県浜松市、愛知県豊田市をはじめ、全国各地に大小さまざまな日系コミュニティが形成されました。

それから30年余り。リーマンショックや東日本大震災などを機に帰国した人も少なくない中、それでも日本に残ることを選択し地域に根をおろして暮らしている人々がたくさんいます。

海外移住資料館のあるここ神奈川県横浜市にも、日系コミュニティがあるのをご存知でしょうか？そこは、鶴見です。戦前から、工業地帯で働く労働者を沖縄県から多く受入れて来た鶴見には、90年ごろから南米の沖縄系日系人が、鶴見在住の親族や知人を頼ってたくさん移り住みました。もともと多かった中国系住民にこうした南米系住民が加わり、さらにベトナムやフィリピンなどのアジア系住民も加わって、鶴見は何ともユニークな多文化タウンとなっているのです。

沖縄×ラテン×アジア？？？ちょっと変わった国際タウン・鶴見の魅力を探索してみましょう。

地図中の●は沖縄系の食堂。「沖縄タウン鶴見マップ」（鶴見区区政推進課発行）より

鶴見区役所に聞きました

鶴見のキャラクター
「ワッくん」

1 多文化共生社会をリードする鶴見の取組みとは？

人口の5%、およそ20人にひとりが外国籍住民だという横浜市鶴見区。窓口では、従来より配置している通訳ボランティアのほか、タブレット端末による通訳・翻訳や、多言語翻訳機（ポケトーク）の活用など、新しい取組みが導入され、外国籍住民とのコミュニケーションに役立てられています。区から横浜市国際交流協会（YOKE）が委託を受けて運営している「鶴見国際交流ラウンジ」では、多言語による情報提供や相談対応、学習支援、各種教室の開催など、多岐にわたって外国籍住民の生活支援が行われています。

「各課の窓口などは、日々多くの外国人住民と接していますが、文化や習慣の違いから、どれだけ説明しても完全に理解を得られるとは限らない。常に、どこまで伝わったか、まだ不十分なのでは、という葛藤があります」と話すのは区政推進課の担当者。地域の特色や住民のニーズに合わせて常に試行錯誤しているのだと言います。

鶴見国際交流ラウンジ

鶴見では、もともとあった沖縄系コミュニティの団結力や助け合いの精神によって、南米系コミュニティについても「地域に上手く溶け込んでいると思う」と話していました。

2016年から毎年開催されている「鶴見ウチナー祭」も、沖縄と南米が自然と融合した、鶴見ならではの独特のイベントになっていると言います。

「まだまだ課題のほうが多い」としつつも「住みやすい街、おもしろい街と評価してもらえているならとても嬉しい」と話す区職員のみなさんでした。

2 国籍を超えた活動ー地域との信頼関係の積み重ねで

NPO法人ABCジャパン 理事長
安富祖（あふそ） 美智江（みちえ）さん

サンパウロ出身の沖縄系二世。在日30年・鶴見在住28年。二女の母。地域のブラジル人住民に対する相談ボランティアからスタートし、現在はNPO法人ABCジャパンの理事長として、行政とも連携し外国籍住民の生活・教育等の支援を行っている。

ボランティアで日常生活の相談窓口を

デカセギブームが始まる前、1986年ごろにまず兄が鶴見に来ました。その後私も来日して、最初の2年間は群馬県の伊勢崎市に住んでいました。日本は2年だけのつもりでしたが、兄の近くに住もうと思って鶴見に移り、そのままずっと（笑）。

鶴見に来て、最初は知り合いと一緒にKDDIの代理店の仕事をしていました。当時は国際電話やインターネットの手続きが中心でしたが、ブラジル人のお客さんからいろいろな相談を受けるようになりました。例えば宅急便の出し方とか、日本での生活のちょっとした困りごと、そんな相談がどんどん増えていきました。最初は、ブラジル人のための相談窓口としてボランティアでやっていましたが、ボランティアでは活動に限界があると思い、2000年に設立したのがABCジャパンです（2006年にNPO法人化）。

団体の設立前から、地域のイベントなどには積極的に参加してきました。そうする中で日本人の知り合いが少しずつできて、役所関係の手続きとか助成金の申請方法とか、団体の設立や運営に必要なたくさんのサポートをもらえるようになりました。

自分と同じ経験をしなくて済むように

一番力を入れているのが、子どもたちへの教育支援です。私自身、日本で子育てをする中で、周りに相談する人がいなくて本当に大変でした。子どもが学校でもらってくる書類も読めないし、音読の宿題があるなんて下の娘のときにはじめて知りました。上の娘のときは、家庭学習のサポートなんて何もしてあげられなくて、長女に辛い思いをさせてしまったことが、親として辛かったですね。

だから、自分と同じ経験を他のお母さんたちがしなくてすむために、何かしましょうと。それで、まずは外国につながる子どもと保護者向けに小中学校入学のガイドブックを作りました。その後、高校、大学進学用と徐々に新たなものを追加していって、現在は仕事・就職に関するものまで完成しました。

2009年に文科省の委託を受け本格化した子どもの教育支援では、南米だけでなく、中国やフィリピン、ネパールなど、さまざまな国の子どもたちをサポートしています。

学校につなげる学びの場としてのフリースクールや、子どもたちの居場所作り、地域の学校での支援のほか、ポルトガル語教室、日本語能力試験対策講座などをしています。また、第二種電気工事士の資格取得のためのセミナーや、心理カウンセリング等もやっています。

私は「鶴見人」！

仕事で外国籍住民が多く住んでいる地域へよく行きますが、他の地域では、日本語を話さなくても生活できる環境ができあがっていて、コミュニティ自体が固まっているケースが多い。そうなると地域との交流とか支援の輪とかってなかなかな進まないと思うんです。ブラジルで、一世が会館を作ってそこに集まって、ポルトガル語がいつまでもできないのと同じ。鶴見にはブラジル人がいっぱいいるけれど、ブラジル人学校はないんです。どうしても日本語を覚える必要があるし、子どもたちが日本の学校に通うから親は行事でも何でも参加しないといけない。その流れで町内会にも参加する。それが大きいと思います。文化が違うから100%完璧にはできなくても、日本のやり方を覚えよう、マナーを守ろうという気持ちをもって暮らしていれば、日本人と仲良くできると思います。

鶴見は本当にいいところです。28年も住んでいるから、友だちの子どもたちが大人になって親になるところまで見てきている。「何人なの？」って聞かれたら、私は「鶴見人！」と答えます。私にとっては、鶴見が自分の国みたいなもの。一番いい国よ（笑）。

ABCフリースクールで学ぶ子どもたち

3 「日系人が日系人を支える」電気工事会社を起業

株式会社進正電　代表取締役社長
志伊良（しいら）レアンドロ正彦（まさひこ）さん

サンパウロ出身の沖縄系三世。1990年に家族で来日して以来、在日31年・鶴見在住30年。二男一女の父。友人と二人で立ち上げた電気工事会社「進正電」で、多くの日系人を雇用している。

2年間の予定が31年に

日本に来た当時は15歳。友だちと遊びたい盛りで日本に来るのは嫌だったけれど、家族全員で2年間だけ働いてブラジルに戻るという計画で。それから31年になりますが、まだ日本にいます（笑）。

ブラジルでは高校で電子工学を学んでいましたが、2年で帰る予定だったので日本の高校には行かずに働きました。最初は平塚市に住み、いすゞ自動車の下請け工場で働き、その後、鶴見に来て東芝の下請けの梱包会社でも働きました。父がやっていた電気設備工事の仕事を手伝うようになって6年くらい経ったころ、2004年に友人と二人で個人会社を設立しました。まったくのゼロからはじめて現在17年。少しずつですが会社が成長してきました。

日本語は、日本に来てから覚えました。会社設立にあたって、第二種電気工事士の国家資格を取るために独学で勉強して、1年で取得。今でこそABCジャパンのような支援団体があったり、電友協会（鶴見で起業した電気工事会社の日系人社長が集まって設立。20社弱が加盟）でも講習会をやったりしているので、たくさんのブラジル人が国家試験に合格しているけれど、当時はそういうのがまったくなくて、本を買って通勤電車の中で毎日勉強しました。

日系人同士が支え合う

鶴見には南米系の電気工事士が2000人くらいはいると思います。電気工事会社も50社以上はある。大きいところは100人規模、50人規模の会社も5、6社あって、10人規模になると本当にたくさん。ここでは日系人が起業した会社で日系人が働いて、日系人が日系人を支えています。日本の会社で上にいくのは難しいけれど、日系人の会社では頑張れば管理職にだってなれます。

今、うちの従業員はブラジル人のほかに日本人、ペルー人、ベトナム人がいます。

現場は東京23区や神奈川県内が多いけれど、北海道や沖縄、数年前には台湾の新幹線などもやりました。会社を設立してからこれまで、たくさんの波がありましたが、一番大変だったのは、東日本大震災の時。当時は従業員20人ほどを抱えるまでになっていましたが、資材が優先的に東北へ行って手に入らなくなり、3カ月間くらい、仕事がまったくありませんでした。そこから何とか立ち直ったと思ったら今度はコロナ。最初の緊急事態宣言では現場の半分がストップして、売上も半減しました。

起業当初は下請けの応援という形でしたが、今は半分以上が請負。今年から横浜市の入札資格を得たので、今後は入札をとって元請けの仕事を増やしていきたいです。品質と信頼があれば必ずリピートで仕事がくる。そこを大切にしています。

社員旅行やBBQなど、福利厚生も大切にしている

夢を追いかけること

ブラジルの考え方、ブラジルの常識で痛い目にたくさん合いましたし、「ブラジル人のくせに生意気だ」と、よく言われました。そんな中で、日本に住むなら自分が変わらないといけないんだなと思うようになった。30年経ったいま、心は日本人になりましたね。

「日本人になったなぁ！」と自分で思うのは、約束の時間より前に着くようになったこと。人のことを考えるようになりました。昔は行列に並ぶなんてできなかったけど、今はちゃんと並ぶしね（笑）。

ずっと「ブラジル人のくせに」と言われて来て、悔しかったけど、日本で成功するためにどうしたらいいかを考えたら、自分が今いる環境に慣れるしかないんですよ。それで、できるだけ日本人のやり方や考え方を取り込んだり。

今、当時の僕と同じように悔しい思いをしている若者がいたら、「夢を作れ」と伝えたいですね。過去は変えられないので、夢を作ってそれを追いかけて。そうすることで必ず成功できると思っています。

4 生徒の3割が外国籍?! 横浜市立潮田中学校 国際教室ってどんなところ?

横浜市立潮田中学校は、全校生徒のおよそ3割、100名以上が外国とのつながりを持つ子どもたち。南米が大半で、次いで中国やフィリピンが多いといいます。必要に応じてポルトガル語などで授業のサポートを行うための補助教員が配置されている他、日本に来てまだ日が浅く、言葉の問題からクラスでの授業についていけない生徒のために、「国際教室」が設置され、取り出し授業が行われています。国際教室担当の志水拓登先生によると、ほとんどの生徒が約半年〜1年で通常クラスの授業についていけるレベルになるとの事。多文化の共生はごく自然な風景として根付いているそうです。

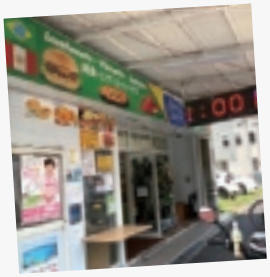
訪れた日は、5時限目に中国籍1名、ブラジル籍2名、計3名の生徒が、国際教室で数学の取り出し授業を受けていました。3名の生徒に対して数学教師1名、言語補助教員1名のほぼ個別指導に近い形で行われ、課題や不得意箇所に取り組んでいました。

国際教室でポルトガル語支援を担当しているのは、ブラジル三世のナカザト・アケミ先生。ご自身も小学校〜中学校時代を日本で過ごした経験をお持ちとのこと。日本の学校生活に溶け込もうとがんばっている子どもたちにとって、国際教室は母語で話せる安心感が何よりも大きいのだと言います。「私も小学校時代に、支援の先生にはとても助けられました」と話すナカザト先生。生徒の不安や悩みに共感し優しく寄り添う姿がとても印象的でした。

取り出し授業とは、日本語がまだ不充分な生徒に別室で母語による教科補助を行うもの。右端がナカザト先生

鶴見食べ歩きメモ

5 ユリショップ
（ブラジル料理・食材・雑貨）



鶴見でお店を開いて21年になる店主のハシカワ・ユリさんはサンパウロ出身の二世。お店の半分はブラジルの食材や雑貨を販売するスーパーで、奥がレストランになっています。お客の7割が南米系ですが、週末には日本人もたくさん来るといいます。人気のメニューはフェイジョアーダ（豆と肉の煮込み）や、ビーフカツなど。

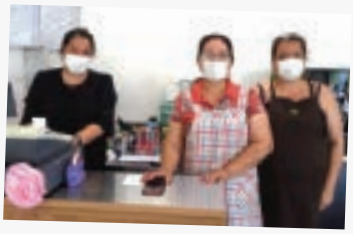
店内には、キング・カズことサッカーの三浦知良選手をはじめ、来店した有名人の写真もたくさん飾ってあります。

●住所：仲通り2-60-15
●営業時間：月～日 10:00～22:00
（月曜日は12時～22時）

6 パライゾ・ブラジル・ヨコハマ
（ブラジル料理・食材）

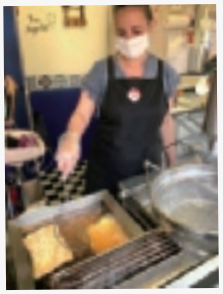
店舗を移転して6月10日にリニューアル・オープンした、ブラジル食材店兼レストラン。店内では精肉も扱っていて、シュラスコ（ブラジル風BBQ）に欠かせないピッカーニャ（イチボ）など、日本のスーパーでは手に入らない部位が人気だそう。

レジで働くレチシアさんはブラジルと日本（沖縄）とのハーフで、鶴見生まれの鶴見っ子。日本語が苦手なブラジル人の母親をサポートしながら、一緒に働いています。



●住所：
栄町通り1-10-12
高島ハイツ2F
●営業時間：月～日11:00～19:00

7 ラビパ・パステウ
（パステウ専門店）



在日28年になるブラジル人のビアンカさんがひとりで切り盛りするパステウ専門店。パステウとは、薄いパイ生地にチーズや肉などの具材を入れてパリパリに揚げたもので、屋台などで食べるブラジル定番の味。

鶴見には南米系のお店がたくさんあるのに、ブラジルではどこにでもあるパステウ専門店がひとつもなかったことから、日系人の夫の勧めで3年前にオープン。南米系住民が通うキリスト教会の真横にあるため、土曜日は教会帰りのお客さんで大賑わいだそう。日本人にも人気で、夕方には行列ができることも。定番のチーズのほか、チキン、カラブレーザ（ブラジルのソーセージ）、具だくさんのスペシャルなどが人気メニュー。キャラメルソースがたっぷり入ったチュロスもオススメ！

●住所：鶴見中央3-4-13
●営業時間：水～土 14:00～20:00

8 KOKY'S
（ペルー料理）

炭火焼ローストチキンが看板商品のペルー料理レストラン。ローストチキンだけでなく、セビッチェ（魚介類のマリネ）やアンティクーチョ（牛の心臓の串焼き）、ロモ・サルタード（牛肉とポテトの炒め物）など、本格的なペルー料理をゆったり楽しめる。また、レジでミートパイやスイーツなどを買えるので、テイクアウトも人気。

●住所：本町通り2-82
●営業時間：月～日 11:30～20:00

9 エル・ボスケ
（ボリビア・沖縄料理）

沖縄とボリビアにルーツを持つご夫婦が経営する南米・沖縄料理レストラン。沖縄そばはもちろん、エンパナーダ（ひき肉などを包んだボリビア風のパイ）やタコライスなどが人気。ランチは日曜日しかやっていないので要注意。

●住所：仲通り1-55-5
●営業時間：17:00～23:00（日曜日のみランチ営業あり）、
水曜定休

10 沖縄物産センター
（沖縄の雑貨・食材・お惣菜）

沖縄の民芸品、食材がほぼ何でも揃うお店。調味料やお菓子、飲み物、缶詰類はもちろん、沖縄そばの麺、冷凍の豚足ややぎ肉、海ぶどうなどのほか、ソーキ（豚のあばら肉）の煮込みや揚げたてサーターアンダギーなどのお惣菜コーナーも充実している。2階が沖縄県人会館（おきつる会館）になっていて、琉球舞踊の教室なども開催されています。

●住所：仲通り3-74-14
●営業時間：月～日 10:00～19:00

オンライン講演会 今年度も好評開催中！

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、昨年度から始まった当館のオンライン講演会。大変好評を頂いており、今年度も引き続き開催しています。

7月からはサンパウロ人文科学研究所が報告した『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査』に基づいた3回の連続講演会「世界最大の日系人コミュニティの実像～440ヵ所のリアルボイス～」を開催中！同調査プロジェクトチームの責任者である細川多美子さんを講師に迎え、7月17日(土)に第1回「実態とその存在感」を開催。8月27日(金)に第2回「アマゾンから雪降る町まで、4000キロを貫く日系魂」を開催しました。最終回の第3回は9月25日(土)に開催予定。ぜひ当館HPからお申込みください。

今後も様々な講演会を開催していく予定ですのでお楽しみに！

6月20日国際日系デー・オンライントークショー開催

アーティスト 大岩オスカール×サンパウロ、東京、ニューヨーク さすらうニッケイ・アイデンティティ

6月20日の国際日系デーを迎え、ブラジル日系二世のアーティスト、大岩オスカールさん(左)と、ブラジル日系三世で武蔵大学教授のアンジェロ・イシさん(右)に、ニューヨークと東京を結んで、グローバルに活動する日系人としてのアイデンティティや、若い世代の日系人へのメッセージなどを語っていただきました。

オスカールさんは「両親がブラジルに移住した日本人で、子供の自分がその環境で育ってきた影響は大きい」としつつも「日本人であろうがブラジル人であろうが他の国の人であろうが、楽しくコミュニケーションをとって、個人的なつきあいや、仕事ができればいい」「教育が重要。教育があれば、人はどこへ行っても、必死でそこで頑張ってやり方を覚えていく。やる気があれば、人間の頭は、同時にいろんなことができる能力があると思う」と語りました。

この対談は、海外日系人協会Youtubeチャンネルでいつでも視聴が可能です。(https://www.youtube.com/user/wwtjadesas)

※大岩オスカールさんはJICA横浜リニューアルにも関わってくださっており、現在JICA横浜入口や2階の柱に大岩さんの作品が設置されています。ご来館の際にはぜひ大岩さんの作品もご覧ください！

2022年の20周年に向けて 海外移住資料館常設展示 一部リニューアル

おかげさまでJICA横浜 海外移住資料館は、来年2022年に開館20周年を迎えます。これまで本当に多くの方々にご来館いただきました。改めて御礼申し上げます。

これを機に、当館は常設展示場の一部リニューアルを行うこととなりました。開館後の約20年間に生じた人の移動や日系人・日系社会の変化も反映し、多文化共生社会に向けた魅力的な展示となるよう、改善を行っていく予定です。

また本リニューアルに伴い、2021年11月29日(月)より、2022年3月末日まで閉館いたします。大変ご迷惑をお掛けいたしますが、2022年4月にまたみなさまをお迎えできるよう準備してまいります。どうぞお楽しみに！

アクセス

■**みなとみらい線：**
「馬車道」駅（4番出口）から徒歩約8分
「みなとみらい」駅（クイーンズスクエア方面改札）から徒歩約15分

■**JR線・市営地下鉄：**
「桜木町」駅から（汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク）徒歩約15分

■**市営バス：**「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

●**開館時間**　10：00～18：00（入館は17：30まで）
●**休 館 日**　月曜日（月曜日が祝祭日の場合は翌日）
2021年11月29日(月)～2022年3月31日(木)
の期間はリニューアル工事のため閉館
●**入 館 料**　無料

JICA ジャイカ
独立行政法人国際協力機構 横浜センター
海 外 移 住 資 料 館
〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号 TEL.045-663-3257 FAX.045-222-7162
https://www.jica.go.jp/jomm
Eメール
jicayic_jomm_info@jica.go.jp